

はるにれの会

若いおかあさんたちへ

向山陽子

私、只今、三十四才。夫、三十四才、一人娘二才の三人家族。結婚六年目、三十一才で娘を身籠りました。遅い出産に入るでしょう。当時の職業は幼稚園教諭。主任という役職にもついています。産休、育児休業あわせて約九ヶ月休んだ後、娘を生後七ヶ月月から保育ママさんに預けて復職。仕事、家事、育児と、時間に追われ、家の中でも走っているような生活の中に、夫、娘をまき

こんでがんばっていましたが、家族全員の精神的疲労慢性化に、厄年を意識せざるを得ないような諸々の事情も重なり、考えるところあって娘が一才四ヶ月の昨年三月退職。十一年続けた愛すべき職業から離れるには大変な決意を要しましたが、今では、ゆったりとした時間を存分に味わいながら、自分で生活を組み立てる喜びも知り、娘の成長をこの目で確かめられることに感謝しなが

ら、地域のおかあさん仲間と子育てについて何だかんだとおしゃべりをしながら楽しく過ごしています。命を育てている喜びを共有しあえる地域のおかあさん仲間と共に、生活しているという実感のあるこの毎日は、私の人生の中でわずかしかない貴重な時間だと思っています。娘の成長と共に私も娘も、他のおかあさん達も、自分の世界を持ち始める事でしょう。そうありたいものです。それ故、今のこの時期を大切にしたい私です。

自己紹介のつもりで娘を身籠ってから今に至るまで、つまり、私のわずか三年にも満たない母親歴（母親歴というのものはずかしいですが…）をこうして書いてみると、妊娠の時期、仕事を持ちながら子育ての時期、地域での子育ての時期とそれぞれにさまざまな事に出会い、考え、対処してきた事を思い出します。それは、どれ一つをとっても、同じ女性として生をうけた娘に語り継がなくてはならない、女性の、夫婦の、家族の、社会の問題につながっていきます。娘が大きくなるにつれ、さら

にいろいろな問題に出会い、考え、対処していくことでしょう。

そして、娘を持って一番嬉しいことは、娘といっしょに、私自身の人生をもう一度生きることができ、私自身をみつめなおす機会を与えられた事です。

こうして書いていると私にとって、妊娠、出産、子育ては幸せいっぱいのように思われるかもしれませんが、私は「妊娠、出産、子育ては女性の最大のストレスである。そのストレスをのりこえていく過程で母親になっていく。それを成母期という。」という意見に賛同します。

授乳とおむつの洗濯に追われる毎日の中で、復職する日を指折り数えたものでしたし、預ける保育ママさんがなかなか決まらなかった時は、私はこのまま家の中にうずもれなくてはならないのではないかと、あせったものです。「子殺し」や「主婦のアルコール中毒」の事件には、そうなっていた母親や主婦の気持ちがかかる気がしました。そして私はできるならば辞めたくなかった職場を

離れなくてはなりませんでしたし、公園で出会う地域のおかあさん達の中には「子育てを楽しんでいる向山さんが羨ましい。楽しいなんて思ったことはない。」と帰りの遅いご主人を待つ子どもと二人だけの生活を嘆く人が大勢います。私は同じやるなら楽しまなくっちゃと思っていただけですし、「はるにれの会」の仲間と話して発散したり、出産が遅かったために友達や、幼稚園のおかあさん達の経験談を聞けて、他の人よりも予習ができているのかもしれない。幸いにも、子どもの遊びをおもしろいと楽しめることは、児童学科卒で、幼稚園で子どもとの生活に長年浸っていたお陰かもしれません。

ある時、公園の落葉でやきいもをしたり、歩いて30分位のS公園へのピクニックを提案しましたところ、子ども達よりもおかあさん達がはりきって参加するのです。誰も皆、時には日常から離れて外へ出たいのです。毎週火曜日は公園でお弁当を食べることにしたり、冬の間は、一軒ずつ順番に家を開放し、たくさんの母子が集まっ
つてにぎやかにやるようになりました。その中で「子ど

もを預けて働きに出ようかと悩んでいたの。だって昼間子どもと二人きりで、二人ともイライラしてるの。子ども、子ども私も友達欲しかったね。」というおかあさん。「公園での井戸端会議を馬鹿にしていたけれど、ここで発散するのが一番いいわ。」とお姑さんとの事を泣きながら話すおかあさん。「今度の夏には水と絵の具を使って我家で水遊びをしましょうね。絵の趣味は子どもが大きくなるまであきらめていたけれど、子どもと遊びで楽しめそう。自分の子どもだけでは思いつかなかったわ。」というおかあさん。動物園や人形劇も観にいきました。おしゃべりは自分の事から子どもの事、世の中の事へと広がっていきます。

(1) 「Kさんは相手のおかあさんに気兼ねして○○ちゃんに言いすぎよ。○○ちゃんにとっては無実の罪が多いわよ。こうしてみんなで仲良くなれば、気兼ねで我子を叱る事もなくなるし、悪い事には他人の子でも叱れるようになるわね。」

(10) ⑥ 「Mさんちではベッドにのつてもいいの？ 我

家は子どもに制限しすぎかしら。」④「うちは狭いでしよう。ベッドを制限したら遊ぶところがなくなってしまうもの。ベッドはとんだり、とびおりたり、視点が高くなっておもしろそうよ。うさぎ小屋がどんどんおもちゃ箱になっていくわ。」⑤「その家その家の都合、規則があつていいんじゃないかしら。子ども達もこの家では叱られたけれど、あの家では叱られなかった。いろんな家があるんだなあつてわかつていくのではないかしら。」⑥「うちは、子どものためにおとなの領域を左右されることはないと思つているのだけれど。それにうちの子もよくいう事をきくし……。」⑦「それでいいんじゃない？ただ親が頭の中であれやこれや考えるだけじゃなく、子どもをもつと見て、必要ならば子どもに譲れる位の柔軟性があつてもいいと思ふけど…Tくんを見てみるとよくいう事をきくから余計にもう少し自由にさせてあげてもいいと思うな…。うちの子もTくんに似てるので気をつけなくてはと思つているの。」⑧「そうね。旦那さんの考えもあるものね。うちは子どもが一人の時はどうに

か夜はうさぎ小屋にもどつたけれど、二人になつてからは、一日中おもちゃ箱の観もあるわね。主人もしばらくは仕方がないと諦めてるようよ。」

(イ)、(ロ)はある日のおしゃべりです。良い話しあいができるようにもなつてきました。子ども達もけんかしたり、泣いたりしながら、経験を積んでるようです。

子どもが幼稚園に行くようになれば、おかあさん同志のつながりもできるでしょうが、それまでの三、四年おcaaさんとして本当に初期の時代に自分から友達を積極的に作っていくことをおすすすめします。近くの公園に毎日(午前中がよいと思ひます)通うのです。子どものお散歩のために、おかあさんの発散のために。きつと同じような母子がいます。いなくとも毎日通つてると必ず現われます。私達母子が遊んでる公園をはじめから今のように多くの親子が集まつてくるのではありませんでした。「たぐさんの公園を回つたけど午前中は人がいなくてね。ここへきて、赤ちゃんがいるのでホツとしたの。」というおかあさんが多くいます。とじこもらずいる

いろいろな人と友達になってください。いろいろな子どもに、いろいろな考えに触れるために。

最後に、この三年間の私の妊娠、出産、子育ての実際から、印象に深く、是非伝えたい事をいくつか書いて終わりにします。

◎私の妊娠 私達夫婦は、夫の強い意向で「人口問題」「社会情勢」を考えて、「子どもは作らない」夫婦でした。私も賛同したと夫はいます。結婚時には、それ程深く考えなかった私であつたでしょう。「それでもいい」と思つてもいたようです。私自身、仕事面では充実していましたが、休日には二人で旅行をして、楽しんでいました。その私が、三十才を間近に感じる頃から無精に子どもを産み、たくなつたのです。子どもが欲しいとか、育てたいではなく、「せっかく女に生まれたのにな、このまま、子宮を使わなくていいのか。卵子をすべて捨て去っていいのか」という欲望にも似たものでした。体が、器官をすべて使ってほしいと訴えているようでし

た。おなかの大きな人を見ると、赤ちゃんを見ると涙が出るのです。夫に、泣いてわめいて頼む事数回、「別れるか、産むかどちらかにして!!」と迫る私に、「一人だけ」「私は仕事を辞める」と約束して、彼は主義を曲げてくれました。今思うと、狂気そのものでした。こうして、半年後に私は妊娠しました。と同時に、仕事をいつ辞めるかという悩みが生じました。

◎私の産院選び 妊娠判定を受けた後、「○月○日○時に来院の事」と告げられました。その日は仕事の関係でどうしても都合がつかず、その旨申し出たところ、返ってきた言葉はたった一言、「それなら産めませぬ。」子宮中心に巡りはじめていた血液が頭に逆流し、不信感でいっぱいになり、「ここでは産めない」と決めていました。小さいながらも、産科では名の知れた病院なのに。この時から私の産院探しはじまりました。身近な人達の例から、母子同室、病院の都合で産まれる日を管理されない、小規模で、医療に安心のできる産院を探しました。とはいえ、どこをどう探してよいのかわから

ない暗中模索の中、一つの新聞記事に出会ったのです。母乳保育を完全に推し進めるために、ラマーズ法出産、母子同室、経験豊かな助産婦さんの産後の母親指導に力を入れている人間味あふれる、街の小さな産院の記事でした。『ここだ!!』とひらめきにも似た感動があり、これでやっと母になれると、安心したものでした。妊娠四ヶ月の半ばに入っていました。地域のおかあさんの中にも、産院をきちんと選ばよかったと悔やむ人が大勢います。特に初産の時は、産院選びのための情報は得にくいのが現状です。もっともっと経験者の情報を交換したい、母にも子にも良いお産を広める必要を痛切に感じます。

私はそのN産院に通う毎にN産院が好きになっていきました。暖かく、母親になるための不安を優しく解消してくれるのです。ですから実家が遠方の事もありませんが、里帰り出産をせずN産院で出産することにし、私の母が産後、上京してくれることになりました。

◎私の出産 出産予定日ははるかに過ぎても陣痛らし

きものも夜には消えてしまいう毎日が続きました。胎盤の機能を調べながらあくまでも自然分娩を主張してくださいる院長先生、助産婦さん達に励まされ、この産院を選んでも本当に良かったと感謝しました。周囲の人達の心配に私自身も不安になる事もありましたが、そんな時、夫が「あせるなよ。いつかは出てくるのだから。」とおちついていてくれた事が一番の力になりました。予定日を一ヶ月過ぎて入院。微弱陣痛で、子宮口が硬くなかなか開かずなかなか分娩台にのりません。やっと子宮が開き待ちに待った分娩台では、嬉しくて嬉しくて興奮して冗談さえ口走ったのを覚えています。ところが、産声をふきこむために回していたテープを後で聞くと、院長先生と婦長先生の会話から、お二人は帝王切開覚悟で臨んでいた事がわかり、自然分娩できた事に改めて感謝するのです。入院して四日目にやっと母となり、難産で母体回復のため、普通より遅くはじまった母子同室の一週間は、授乳もうまくいき、幸せいっぱいの日々でした。

◎生後一ヶ月 私の母親としての三年間の中で最も疲

れ果てたのは、退院後の我家での母を加えての二週間でした。私と娘とは既に産院で共に生活しているので、娘の世話も初孫を迎える母よりも慣れていました。ですから、初孫の世話を楽しみに勇んで上京し、あれやこれやと世話をやきすぎる母に、又、夫に気を使ひすぎる母に、私はイライラしていました。母への甘えもあつたでしょうし、産まれたばかりの赤ん坊を守る動物そのもので、私と娘の間に口出し、手出しする者は例え私の実の母であろうと排除しようとしたのです。抱き方、入浴のさせ方が気に入らず、不安で、すぐに私が代わつたものでした。母は、孫の世話を思うようにできず、慣れない家、街、そして、関東のからっ風も体にはきつく、心身共に疲れきつて帰っていききました。母にはすまない事をしたと後悔しながらも、正直、母が帰って私は精神的な安定をとり戻したのでした。誰もが、母として、父として、祖母としてののはじめての経験にとまどっていたのでしょうか。

私が三十才を過ぎてからの出産である以上、私の母も

年をとっているわけで、この事があって、私にとって母親とは甘えるものではなく、いたわるものに変わりつつある現実をやっとわかりはじめたのでした。

この、新しい母親への補佐役については、私の今の関心事の一つです。核家族や、子どもが少なくなっている傾向、又私のような高齢出産が増えている中で、産婦が最も精神的にナイーブな時期に経験豊かな、産婦の精神的安定を第一に考え、体力、精神力も必要なこの補佐役については、今後も考え続けていきたいと思ひます。

◎そして… はじめて母親になった人で、保健所の保健婦さんや、栄養士さんに「体重が少ない」「離乳ができていない」と叱られ、自信をなくして悩むおかあさんを何人も知っています。ある赤ちゃんは、小柄だけれどピチピチして健康そのものです。六ヶ月検診の時、最近一ヶ月の体重のび率が平均より下回り、その事が母親失格のように言われ、「母乳を信じすぎるからよ。」とまで言われたようです。若いおかあさんは、せっかく母乳でがんばってきたのにと元氣なく話すのです。私はこう

いう話を耳にするたびに、保健婦や、栄養士の方に反省してほしいと憤りを覚えます。多くは、問題点を指摘して、がんばっている若いおかあさん達を自信喪失にさせるだけで、やさしく今後を力づけてはくれません。子育てを楽しくできるよう専門的知識を利用して力づけ、励ますのが、この方達の任務なのに、全く逆の役割をしているのですもの。こんな時に力になってくれるのが経験豊富なおばあちゃんであったり、地域のおかあさん仲間であったりします。「大丈夫、大丈夫、こんなに元氣じゃないの。」昔は、ガキ大将が家へ帰るとおかあさんのおっぱいをすってたなんて話はザラだったよ。今の子はそんなに早くおっぱいから離されるのかい。可哀相に」という風に。

育児書や「平均値」とやらの数字に悩まされる子育てを、おばあちゃんや、おかあさん達の経験に支えられての子育てとしては、どちらが明るく大らかにできるでしょう。

若いおかあさんたち、子育ての経験談や情報を交換しあい、共に育ちあいましょう。

はるにれの会で、ご一緒しませんか。

